

いのち (上)

橋田壽賀子



NHKテレビ・シナリオ

NHKテレビ・シナリオ

いのち

(上)

日本放送出版協会

橋田壽賀子





橋田壽賀子（はしだ・すがこ）

大正14年京城で生まれる。日本女子大学国文科を経て、早稲田大学文学部芸術科卒業。昭和25年松竹脚本部入社、35年退社。以後シナリオ・ライターとして、数々のテレビドラマの脚本を執筆、あわせて劇作家としても数多くの舞台台本を手がけている。その幅広い活躍で、53年度放送文化賞を、また、「おしん」で59年度菊池寛賞を受賞した。

代表作として、大河ドラマ「おんな太閤記」、銀河テレビ小説「となりの芝生」、朝の連続テレビ小説「おしん」がある。

NHKテレビ・シナリオ

いのち (上)

定価 一、四〇〇円

昭和六十一年三月二十日 第一刷発行

著者 橋田壽賀子

発行者 藤根井和夫

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町四二一（〒150）

電話 〇三―四六四―七三一一

振替 東京一―四九七〇一

編集協力 天野隆子／津島康一／ドラマ制作班

印刷 亨有堂／近代美術／千代田グラフィヤ

製本 石毛製本

検印廃止

© 1986 Sugako Hashida Printed in Japan

ISBN 4-14-005123-X C0393 ¥1,400E

（落丁本・乱丁本はお取り替えます）

い
の
ち

(上)

装 装
幀 画

蟹 田
江 代
征 素
治 魁

目次

1	帰郷……………	7
2	母と娘……………	38
3	母よ……………	61
4	旅立ち……………	84
5	めぐり逢い……………	109
6	落日の家……………	131
7	いとしき大地……………	154
8	姉妹……………	177
9	若者たち……………	200
10	ひとすじの道……………	223

17	16	15	14	13	12	11
わかれ道	嵐の青春	花嫁の父	父と娘	希望	故郷へ	卒業
.....						
384	362	339	317	294	270	246

放送記録（大河ドラマ 毎週日曜日、夜八時～八時四十五分）
 上巻には、昭和六十一年一月五日放送の第一回より、四月二十七日
 放送の第十七回までのシナリオを収載しました。

●スタッフ

音楽	坂田晃一
制作	澁谷康生
デスク	山岸康則
演出	伊豫田静弘
	富沢正幸
	布施実
	金沢宏次
美術	川口直次
技術	大沼伸吉
効果	広瀬洋介
監修	小木新造
	小館衷三
医事監修	行天良雄
	白石幸治郎
衣裳考証	小泉清子
方言指導	津島康一
	相沢ケイ子

●キャスト

高原未希	三田佳子
佐智	石野真子
千恵	久我美子
正道	丹波哲郎
工藤清吉	大坂志郎
イネ	赤木春恵
浜村直彦	役所広司
とも子	小林千登勢
中川邦之	渡辺 徹
岩田剛造	伊武雅刀
初子	山咲千里
テル	菅井きん
八木金太	吉 幾三
弘道	石田弦太郎
正枝	長内美那子
時枝	浅利香津代

君枝

左 時枝

花田健作	藤堂新二
八田鶴松	今福将雄
坂口一成	宇津井 健
美代	野際陽子
村中ハル	泉ピン子
ナレーター	奈良岡朋子

帰郷

N——昭和二十年八月十五日、日本は天皇の終戦の詔勅により、昭和六年満州事変から始まった十五年にわたる長い戦争に、終止符を打った。国民のすべてが敗戦国の迎える運命がどのようなものか想像もつかぬまま、かつて経験したことのない大きな転機にただ戸惑い、混乱のるつぼと化している終戦三日後のことである。

青森行きの列車が、焦土の東京を脱出する乗客を満載して、上野駅を発った。烈しい空襲による車両の破壊や焼失、燃料の不足などで、運転もままならない国鉄では、切符の発売をきびしく制限し、よほどの事情がなければ長距離乗車の許可はもらえず、許可をもらっても、切符を買うのに並び、またホームで乗車の順番を待つといった状態で、客車には貨車があてられることさえあった。それでもやっと動いている数少ない輸送機関に乗客が殺到し、たとえ貨車でも乗れたのは運

のいいひとたちであった。

走る貨車の中（午後）

一様に粗末で垢じみているが、さまざまな服装をし、いろんな荷物を抱えたり、背負ったりした老若男女たちが、ギューギュー詰めにされてうずくまっている。

入り口では座れずに不安定な恰好で立っているものや、壁につかまって宙ぶらりんでいるのもある。

その中にやっと腰をおろせたらしく、肩を寄せ合って不安そうにおし黙っている高原未希（20）と佐智（16）の姉妹。

兵隊の服装をした男が怒鳴る。

元兵隊「もっと詰めるッ。荷物は膝へのせるんだッ。（と

女Aに）その女ッ、きこえんのかッ」

大きな荷物を横において眠ったふりをしている女A——。

座っているひとたちを乗りこえてその女のそばへ行く元兵隊。

元兵隊「起きろッ。荷物で場所をとることは許さんッ」

女A「偉そうなこというんじゃないよッ。お前兵隊かあ。

お前みたいな兵隊のおかげで日本は負けたんだッ」

元兵隊「なんだとッ」

女A「お前なんか威張られてたまるかッ。もう軍人もへ
チマもないんだからなッ」

元兵隊「(カーッとし) 黙れッ。貴様、軍人を愚弄するの
かッ」

そばにいた男Aがあわてて止めると、

男A「やめろッ、くだらんことで喧嘩するときじゃない
だろ。(と女Aに) あんた、その荷物に腰かけなさい」

女A「荷物がつぶれちまうよ」

男B「荷物より人間のほうが大事だべ。立ってるひとの身
にもなったらどだ」

女A「私はね、二日も並んでやっと乗れたんだ。座りたき
やあ次の汽車に乗ればいいじゃないかッ」

立っている男C「私だたて、(と立っている女Bを見やり)
このひとだたておなじように待ってやっと順番がきた
んだ。せめて女のひとだけでも座らせてやったらどう
だんだ。相身互いじゃねか」

知らん顔の女A。

それへ、

男B「ここに乘ってるひとたちは、みんなそれぞれに緊急
の事情があって、買えぬ切符を買う許可ももらって、

ギュー詰め列車だて我慢してるんだ。無事目的地に着
けるまで助け合うのがほんとうだべ……」

女A、また眠ったふりをしはじめた。

と、ガタンと汽車が止まり、その拍子に立ってい
るひとたちが、座っているひとたちの上に横倒し
になる——。

あわてて佐智をかばっている未希。

女A「痛いッ」

女Aの荷物の上に、立っていた女Bがはうり出さ
れて座っている——揺れたおかげで隙間ができ、
立っていたひとたちもなんとなく割りこんで座れ
る。

女Aも諦めたように自分が荷物の上に座り、女B
に席を譲ってやる。

男C「また止まった。この調子だんだば、いつ青森さ着く
がさ、わがねな」

男D「全くだあ、おまげに貨車さ詰めこまえて、まるつき
り荷物扱いだ」

男E「しかたないでしょう。乗れなかったひとだっていっ
ぱいいるんです。文句いったら罰あたりますよ」

未希「(そつと佐智に) 大丈夫……？ 辛抱できる……？
脚痛かったら途中で降りてもいいのよ」

佐智「平気ッ。(と笑ってみせると)よかった、みんな座
れて……」

未希「もう入らないかと思っただけど、けっこう詰められる
もんね(と笑う)」

佐智「これで静かになるわ。少し寝なさい、お姉ちゃん
……。ずうっと寝てないんだから」

ひとに隠すようにしてなにか食べはじめ乗客た
ちもいる。

未希「(つらそうに佐智に)お腹すいたでしょう。ごめん
ね、乗る前になにか手に入るとよかったんだけど……」

佐智「三日や四日食べなくなつたって死にやしないってい
たでしょう。(と明るく笑ってみせ)チビの食料だけ
あつたら……。 (と抱きしめている布の袋をそつと撫
でながら) チビがおとなしくしてくれてるから助かっ
ちゃう。いい子いい子……」

ふと不安そうに袋を見つめる未希。

と、

男F「暑いなあ。まるきり蒸し風呂だ。もうちょっと戸を
開けたらどうなんだ」

戸のそばの男G、憤然として、

男G「冗談でねよッ、これ以上開けたら、振り落とさいで
しまるよッ」

男F「窓ねんだ、しかたねだろッ。少しでもいいからよッ」

男H「我慢我慢ッ。空襲で焼け死んだひとたちのこと思っ
たら、暑いなんて贅沢だぞ、生き残っただけでもあり
がたいと思わなきゃあな」

男I「ああッ、暑ふてけっこうッ。みんな汗になって出て
けたら、小便さ行く手間はふげでいいや。なんせ便所
もついてねえんだからな」

と、またガタンと止まる汽車。

男F「あッ、止まったぞ。今のうちにちよつと風入れろッ」
男D「(男Gに)頼むッ、我慢できねよ」

男G、戸を開けると、入り口に殺到するひとたち、
懸命に這いあがって乗ろうとする——びっくりす
る乗客たち。

男E「なんだ駅かッ」

男A「どこだッ」

男B「土浦らしいな」

男C「もう乗れねよッ。早く戸は閉めろッ」

男G「(ホームの客たちに)だめだッ。これ以上は無理だ
どッ」

と夢中で戸を閉めようとする。

が、必死で入り口にしがみついている男や女たち
――。

その中に、村中ハル(20)もいる。

が、乗っている男たちは、冷酷に乗せまいとして、
這いあがろうとするひとたちを蹴落とし、戸を閉
めようとする。

ホームの男「乗せろッ。みんな何日も待つてゐるんだッ、お
前たちだけの汽車じゃないだろ」

男G「だめだもんは、だめだッ」

乗ろうとする男たちの手を踏みつける。

「痛えッ!!」と転がり落ちる男たち——。

ハルは手を踏まれてもくじけず、

ハル「お願いだッ、この汽車に乗らないと母ちゃんの死に
目にあえないかもしれないんだよ。危篤なんだッ。

田舎の母ちゃんが……。立っててもいいから乗せて
くれッ」

それまでわざと顔をそむけて見ぬふりをしていた
未希が、いきなり立つと座っているひとたちを敏
捷に乗りこえ、入り口へ行ってハルの手をとって
つばり上げようとする。

男G「(未希に)なにするんだッ」

未希「ひとりでくらいいならんとしてもなるわッ。お母さんに
会わせてあげなきゃ、一生後悔するわ、このひとッ

……」

と男Gの制止を振りきって、懸命にハルを抱きあ
げる——やっとな乗れるハル。

ハルが乗ると同時に戸を開める男G。ホームのひ
とたちが戸を叩きながら、「開けろッ」「乗せろッ」
とわめいている——その怒号に耐えている乗客た
ち。

未希「(まわりの乗客たちに)すみません。もう少し詰め
ていただけますか」

と自分も小さくなり、佐智も身をちぢめてハルが
座る隙間をつくる。

ハル「(まわりの乗客たちに)割りこんで申しわけありま
せん。(とベコベコ頭を下げ未希に)ありがとうございます
いました。助かりました。ご恩は一生忘れません」

未希「乗れなかったほかのかたたちには悪いけど、あなた
は特別の事情なんだから……」

ハル「よかったあ。(と背負っていたリュックサックをお
ろしてその上に座り未希に)窮屈な思いさせてしまっ
て……」

佐智「(笑って小声で)いざとなれば、まだまだ詰められ
るよ。(と未希に)もっと乗せてあげればいいのに
ね」

未希「佐智ッ(と小声でたしなめる)」

ハル「もう諦めてたんだ。あんたのおかげだ、運がよかったあ」

未希「どこまでいらっしやるの？」

ハル「青森ッ」

未希「青森にいらっしやるの、お母さん？」

ハル「曖昧に」あ……ああ」

佐智「（未希に）じゃ、青森まで一緒ね」

ハル「（未希に）あんたも青森……？ よかったあ、いい連れができてッ……」

と汽車が動きだす。

ハル「動いたッ。これでやれやれだ。やっと落ちついて弁

当も食べられる」

とリュックサックを開け、包みを取り出してひろ

げる——焼きむすびがのぞく。

あわてて目をそらせる未希。

ハル「焼きむすびだ、ひとつどうだ」

と未希にさし出す。

未希「いいのッ、いいのよッ」

ハル「遠慮は無用ッ。お礼の気持だ」

未希「私、そんなつもりで……」

ハル「わかってるって……。旅は道連れ、世は情けってね

（と未希の手に持たせる）」

未希「ありがとう。こんなおむすび久しぶりだわあ。あるところにはあるのねえ。（と佐智に）佐智、いただきなさい」

佐智「私はい。お姉ちゃん、ずっと食べてないんじゃないの？」

ハル「（佐智を見）なんだ、あんた、このひとの妹さん

……？ じゃあんたもひとつ……」

と焼きむすびを佐智にも渡す——びっくりして尻ごみする佐智。

ハル「まだあるんだからッ」

と、佐智が抱きしめている布袋の中で子犬の小さくなく声がする。

佐智「チビ、なくんじゃないの」

が、しだいに大きくなきだす子犬の声。

男I「誰だッ。犬だなんて連えているのッ……?!」

ドキッとする、佐智。

男J「うるさいなッ。こんなすし詰め列車に犬乗せるなんて非常識にもほどがあるぞッ。捨てちまえッ」

ハル「（カッとして男たちに）犬連れててなにが悪いんだよ、あんたたちにかみつくわけでも餌くれってわけ

でもないんだ。犬よりあんたたちのほうがよっぽどう

るさいよッ」

男J「動物は汽車に乗せられないことになってるんだぞッ」

ハル「なにが汽車だッ、これは貨車だよ。人間乗せるのはおかしくても、動物が乗ってたって文句いえた筋合いかいッ。(と佐智に) 犬もひもじいんだよ。これ食べさせておやりよ」

佐智「……」

ハル「せっかく連れてきたんだ、可哀想じゃないか(と佐智にむすびを押しつける)」

佐智「犬が食べる分は持ってます」

と、袋から大豆のいったのを出す。

ハル「大豆のいったのじゃあ可哀想だよ、犬が……」

佐智「じゃ遠慮なく……。チビと分けていただきます」

ハル「あなたの分もあるから」

袋から子犬の首を出すと、むすびを食べさせる佐智。

末希「(ハルに) ありがとうございました。昨日からなんにも食べてなかったんです」

ハル「(呆れて) こんな汽車じゃあ、青森まで何日かかるかわからないっていうのに、あんたたち飲まず食わずでいるつもりなおッ!」

末希「持ってきたくったって、おいそれと食料が手に入る

はずもないし……」

ハル「そりゃそうだ。(と笑い) いいよ、私、五日分くらいのもなら持つてる。分け合って食べたら、なんとか青森まではもつだろう。こんな汽車に乗り合わせたのも、なにかの縁だ、心配ないよ」

びっくりしたようにハルを見る末希と佐智——ハル、子犬の頭を撫でながら、

ハル「お前はしあわせもんだ、こんな心の優しいひとに飼われてさ。捨てられたら飢え死にしちまってるよ、今ごろ……」

のんきな顔のハルである。

たんぼや野原の続く中を、せっせと走っている列車

走る貨車の中(午後)

乗客たちは疲れきったように眠りこけている。

と、ガタンガタンと汽車が止まる。

目をさます乗客たち。

男A「どこだ?」

男B「駅なら戸を閉めろ」

男E「(あわてて) 俺、盛岡で降りるんだ」

男C「まだまだだよ、盛岡だなんて……」

男G少し戸を開けてみ、

男G「野原の真ん中だあ。(とあわてて大きく戸を開け)

きれいな夕焼けだあ。あれ、みんな小便に降りてるぞ」

男H「じゃ、俺も今のうちにッ」

と立つと外へとび降りる――。

われもわれもと降りる乗客たち。

ハル、未希と佐智に、

ハル「私たちも用足しといったほうがいいんじゃない？」

未希「佐智……？」

佐智「私はいい」

ハル「(佐智に)できるとき、しとかなきゃあ……。各駅停車

車だっていったって、駅じゃあとっても降りられない

し、今度いつこんなとこへ止まるか……」

未希「そうよ。順調にいつても青森へ着くのは、明日の朝

なんだから」

佐智「いいのッ」

未希「チビにだって、させとかなきゃあ……」

佐智、しかたなく立ちあがろうとする。

手を貸してやる未希。

佐智、大きく左足をひきずっている。

ハル、気づき、

ハル「(佐智に) あんた……?!」

未希「空襲で脚を怪我して……まだ治っていないんです」

ハル「よしッ、私がおぶったげるッ」

佐智「ひとりで歩けますッ」

未希「そうね、ひとりで大丈夫ね」

が、貨車が高くてとても降りられない。

ハル、さっととび降りると、入り口の下で四つん

這いになる。

ハル「私が踏み台になったげるよ、私の上に降りたらいい」

未希「(ハルに) 申しわけありません。(と佐智に) 私につ

かまって」

佐智、ハルを踏み台にして降りる。

未希「(ハルに) ありがとうございます」

と自分は、とび降り、佐智に手を貸す。

ハル「あの草むらの陰がいいよ」

と自分も佐智に手を貸して歩きだすハル。

野っ原

両側から佐智を抱えるようにして来る未希とハ

ル。

ハル「この草むらなら絶対見えないッ。私、見張ってるか

ら、（と未希に）あんた、妹さん手伝ってあげなさいッ、さ、早くッ」

未希「すみません」

ハル「あ、いいもの持ってたッ。（と懐から風呂敷を出す）と佐智たちの姿を隠すようにひろげて持ち）これがありゃあ安心だ。（と佐智と未希に背を向けて立ちながら）この風呂敷、ホームで待っていると敷いてたの。いろいろ役に立ってくれるよ。（と笑い）あわてることないわよ。まだまだみんなうろうろしてるから」

未希「ご迷惑ばかりかけて」

ハル「こういときは助け合わなきゃあ。（と空を見）静かだねえ、戦争があつたなんて嘘みたい……。よかつたあ、生きて……。青森へ着いたら、あのひとにも会える……。もう空襲の心配もないし、安心して子供だつて産める……」

未希「あなた、赤ちゃんがッ……?!」

ハル「今、五か月に入つたところ」

未希「奥さんのお」

ハル「（未希に背を向けたまま）そのひと、青森のひとでね、青森の連隊へ召集されたんだけど、戦争終わったからもう家へ帰つてると思うの。子供ができたっていったらびっくりするだろうなあ」

未希「そりゃあ首長くして待っていらっしやるわ。お母さんだつておよろこびになるわよ。間に合うといいわね」

ハッとしてしよっぱい顔になるハル。

未希「じゃ、これからはずっと青森にいらっしやるのね？」
ハル「青森っていても海のそばの小さな町だから……。田舎のおかみさんになっちゃうんだろうな」

未希「いいじゃない。それがいちばんおしあわせよ。羨ましいわ」

ハル「（うれしそうに）そうよね。私、土浦の軍需工場に徴用されてただけど、あんな暮らしは二度とごめんだあ。ねえ、あんたたちは青森へなにしていくの？」

未希「私たちは弘前……。家へ帰るの」

ハル「弘前？」

未希「青森で乗り換えてすぐ……」

ハル「そうッ。じゃ、また会えるかもしれないね、おんなじ青森に住んでるのなら」

未希「日本もこれからどうなるのかわからないけど、お互いに元気だったら……。さ、今度は私が見張ってるわ」

ハル「はいはいッ。こういうときはやっぱりひとりじゃ心細いもんね。道連れができてよかった（と草むらへ消